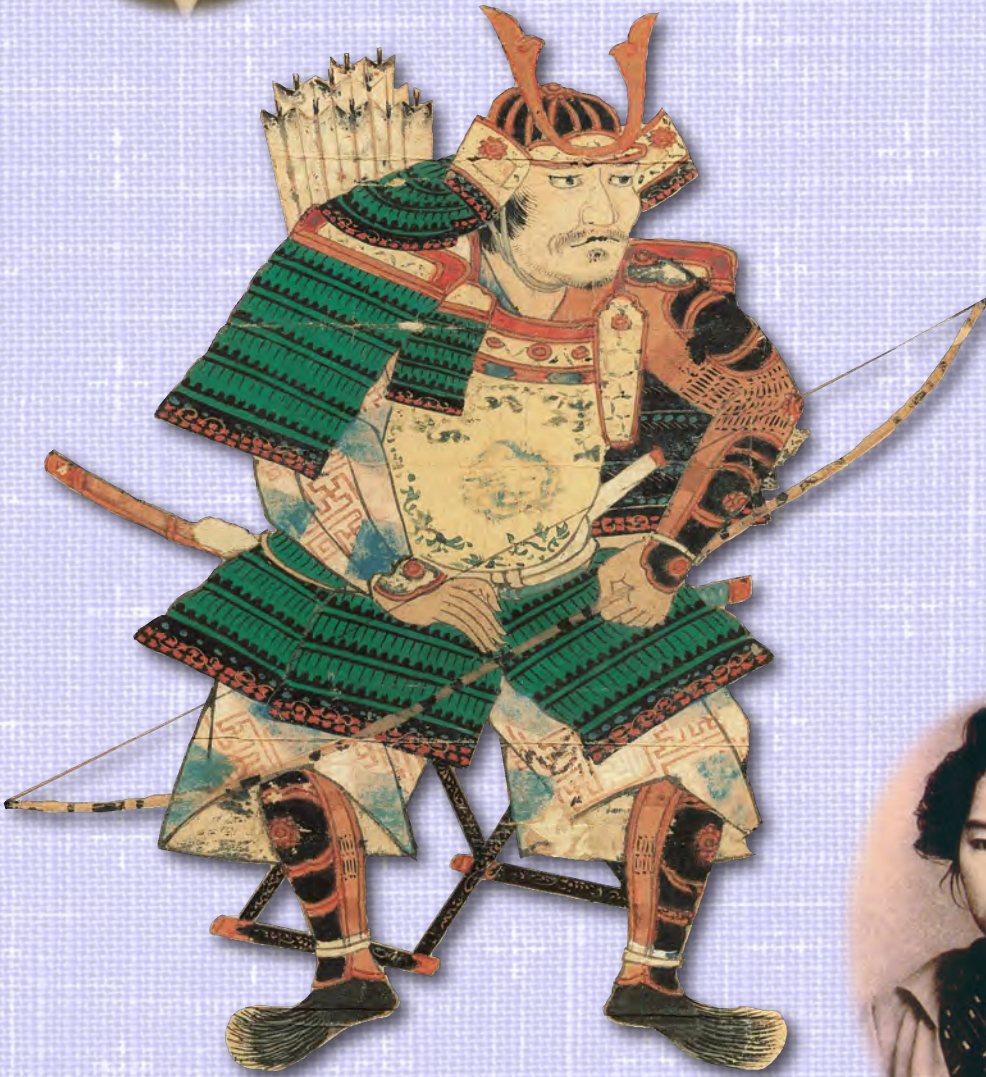


伝えたい！

豊後高田の

先人たち



発刊にあたって

みなさんに伝えたい「豊後高田市の歴史と伝統」

豊後高田市長 永松博文

みなさんのふるさと豊後高田市は、永きにわたり、豊かな自然と歴史や文化が今も多く残っているまちです。

そして、豊後高田市には、長い歴史のなかで、政治、教育、文化、産業など、様々な分野で活躍した多くの先人を輩出しております。みなさんが生きる二十一世紀の社会は、国際化が進み、情報化社会が飛躍的に発展するなど、これまでとは、比べようもない速さで変わっています。

このような社会で、みなさん方は仲間とともに勉強をしたり、協力して活動をします。そして、大人になって、仕事に就き、みんなが生活しやすいような社会を築いていかなければならないのです。

そんなみなさんに伝えたいのは、夢のある社会を作るため、豊後高田の先人達が残した業績や「こころ」を通して、自分たちのふるさとを知り、ふるさとに誇りをもち、ふるさとを大切にすることです。

みなさん方が生まれ育った、このふるさと「豊後高田市」には素晴らしい自然があります。脈々と受け継がれてきた風土があります。そして、これまで豊後高田市を築いてこられた先人の方や偉人の方の功績があります。それらはすべて、ふるさと豊後高田市の財産です。

その財産である、自然・風土・先人の偉業を大切にし、受け継ぎ、活用してもらいたいと考えています。

この先人の生き方や考え方は「二十一世紀を生き抜く力」になってくれます。この「生き抜く力」を根底にすえて、アクティブに未来を築いてほしいと願っています。

この冊子「伝えたい！豊後高田の先人たち」が、夢を持ち、未来に向かって生き抜いていく小・中学生にとって、素晴らしい「生き抜く力」になることを祈って発刊のごあいさつとさせていただきます。

『伝えたい！ 豊後高田の先人たち』 目次

○ 妙覚 <small>みょうがく</small>	【田染荘の危機を救った荘官】	4
○ 吉弘 <small>よしひろ</small>	【主君への忠義を貫いた義将】	6
○ 立花 <small>たちばな</small>	【戦国乱世を生き抜いた名将】	8
○ 吉田 <small>よしだ</small>	【江戸時代の大数学者】	10
○ 塩谷 <small>しおのや</small>	【呉崎新田開発に生涯をささげた開拓者】	12
○ 賀来 <small>か</small>	【幕末三大本草学者―近代植物学の父】	14
○ 駕海 <small>おしうみ</small>	【私塾「涵養舎」主宰―多くの門弟を教育】	16
○ 野上 <small>のがみ</small>	【ふるさとに電灯を灯す】	18
○ 野村 <small>のむら</small>	【豊後高田の「近代化」に大きく貢献】	20
○ 一松 <small>ひとつまつ</small>	【努力と信念の弁護士・政治家】	22
○ 応仁 <small>おうにん</small>	【「天魔の楼」と呼ばれた加礼川を開拓】	24
○ 紀行平 <small>きの ゆきひら</small>	【鎌倉時代を代表する刀鍛冶】	24
○ 大応国師 <small>だいおうこくし</small>	【円福寺の開基とされる臨済宗の高僧】	25
○ 田染 <small>たしぶ</small>	【田染荘の発展に努めた荘官】	25
○ 栄忠 <small>えいちゅう</small>		

- 田原 親貫 たわら ちかつら
- 高橋 紹運 たかはし じょううん
- 河野 次郎右衛門 こうの じろうえもん
- 板井 国良 いたい くによし
- 高橋 正路 たかはし まさみち
- 井上 平四郎 いのうえ へいしろう
- 吉原 真龍 よしはら しんりゅう
- 安東 九華 あんどう きゅうか
- 藤田 信雄 ふじた のぶお
- 方倉 陽二 かたくら ようじ
- 江口 章子 えぐち あやこ
- 鬼丸 義斎 おにまる ぎさい
- 南 次郎 みなみ じろう
- 片多 徳郎 かただ とくろう
- 佐藤 直造 さとう なおぞう
- 金谷 範三 かなや はんぞう

【国東半島最大の反乱を起こす】	26
【敵からも賞賛された義に厚い武将】	26
【九州最古の寺子屋「戴星堂」の創始者】	27
【九州最大の一石地蔵像を彫った仏師】	27
【田染荘の水田を潤す空木池を造った】	28
【水路を引き、干害から地域を救った】	28
【多くの門人を育てた浮世絵師】	29
【幕末から明治に活躍した政治家】	29
【日米友好の架け橋となった、元海軍パイロット】	30
【「ドラえもん」のもう一人の「生みの親」】	30
【北原白秋を支えた情熱の詩人】	31
【初代弾劾裁判長】	31
【国際協調を唱えた陸軍大将】	32
【日本洋画界に新風を吹き込んだ】	32
【真玉の産業を伸ばし村長になった】	33
【戦争拡大を止めるべく尽力した参謀総長】	33

【田染荘の危機を救った荘官】

妙覚

生没年不詳

毎年、田植えの時期に御田植祭で盛り上がる田染荘は、今から約千年前、平安時代にひらかれた荘園の跡地です。荘園というのは、貴族や寺院・神社の領土のことで、田染荘は宇佐神宮の領土でした。田染荘の水田や村の景観は、時代時代の人によって、大切に守られてきました。時には大きな問題に直面することもありましたが、田染荘は千年の間、ほとんど変わらぬ姿で私達の手の元に受け継がれてきたのです。

妙覚という人物は、鎌倉時代後期の荘官（荘園を管理する役人）です。妙覚は田染荘小崎の台藪という村に大きな屋敷（現在の延寿寺）を構え、そこで暮らしていました。

鎌倉時代の田染荘の周辺は、大分の大友氏の家臣達が領土を広げる活動をしていました。中でも小田原氏や狭間氏といった武士は、田染荘や六郷満山の寺院の土地を奪いにやってきました。多くの水田や屋敷を実際に自分のものにしていました。この頃、日本の各地で武士が同じような活動をして、消滅する荘園も数多くありました。

鎌倉時代最大の事件を機に、妙覚は田染荘を守る方策を見出

します。文永十一年（一二七四）と弘安四年（一二八一）の二回にわたり大船団で押し寄せたモンゴル軍は、九州各地で大きな被害を出しました。九州中から多くの武士が集められ、大分からも大友氏の家臣達や、宇佐神宮を守護する武士達が戦地に赴きました。大友氏の家臣達は、モンゴル軍のすさまじい攻撃の中、思うように活躍ができませんでした。

武士達が押し寄せる敵兵としてのぎを削っている間、各地の寺院・神社も祈禱によってモンゴル軍を撃退しようとなりました。宇佐神宮は、宇佐八幡宮とも呼ばれる八幡社の総本山で、祀られている八幡神は武運・武芸の神様として有名です。また宇佐神宮と関係が深い多くの六郷満山の寺院も、国難があった時にはそれを鎮める仏事を行っていました。神官や僧侶の懸命の祈禱が続けられ、戦地では嵐が起こって、モンゴル軍の船団は海に沈んでいきました。当時の人々は、祈禱のおかげで日本が助かったと考えたので、朝廷や鎌倉幕府は祈禱を行った寺院・神社に大変感謝しました。

モンゴル軍の襲来は防ぎこせしましたが、日本が新たに得た領土はなく、鎌倉幕府はその褒美をどうするか悩みます。そして鎌倉幕府は寺院・神社を助けるために「神領興行」を認めます。神領興行とは、全国各地でモンゴル軍撃退の祈禱を行った寺院・神社が、武士に奪われてしまった領土を返還することを定めたものでした。田染荘も宇佐神宮の領土でしたので、神領



田染荘小崎の農村景観（国選定重要文化的景観）

興行によって領土を武士から取り返す土台ができたのです。妙覚は田んぼや屋敷を占領していた武士達に対して、土地を取り返す動きを始めました。

しかし、奪われた領土を奪い返すのは一筋縄ではいきません

でした。武士達は妙覚よりも強い力を持っていたので、居座られてしまったのです。

そこで妙覚は、裁判を起こします。鎌倉時代の武士達は裁判を重要視していましたので、裁判で決着をつければ、武士達も立ち退かざるをえないだろうと考えたのです。妙覚は、宇佐神宮の力を借りながら鎮西探題（当時、九州に関わる裁判をつかさどっていた）に武士達のことを訴えました。

鎮西探題の裁定はこうでした。「田染荘の恒任名（妙覚が暮らしていた地名）は、妙覚が祖父の代から守り継いできた土地である。武士は武力で脅して土地の奪うのを止め、妙覚に土地を返しなさい。」妙覚は裁判で勝利を収め、武士達から荘園を守ったのでした。

この時、妙覚は既に高齢でした。自分が死んだ後、相続があまりに状態では、また武士達につけいる隙を与えてしまいました。妙覚は取り返した土地をすぐさま息子たちに配分する帳簿を作りしました。その帳簿の最後には、妙覚が息子たちと交わした約束の内容が書いてあります。「末の末の代まで、みなが思いをひとつにして、田染荘の領土を守ってゆくのです。」

この妙覚の強い思いがあつてかは分かりませんが、田染荘の風景は千年の間ほとんど変わることなく、守り継がれてきました。私達もこの素晴らしい田染荘の風景を、思いをひとつにして未来に引き継いでいきましょう。

【主君への忠義を貫いた義将】



吉弘
よしひろ

統幸
むねゆき

永禄六年（一五六三）
〜慶長五年（一六〇〇）

吉弘統幸は主君への変わらぬ忠義と、石垣原合戦での奮戦を現在でも称えられている都甲地域を代表する戦国武将の一人です。

吉弘氏は鎌倉時代から大友氏に仕えていた武士の一族で、現在の国東市武蔵地区に領地を持っていました。戦国時代の頃、大友氏にとって重要な戦略拠点であった都甲地域に、その実力と忠誠心を評価されて吉弘氏は移ってきました。実際に統幸の祖父である鑑理や、父・鎮信は大友氏の重臣として数多くの合戦で活躍しました。また、養子にいったため苗字は異なりますが、高橋紹運や立花宗茂といった名だたる武将たちも吉弘一族の出身です。紹運は統幸の叔父、宗茂は統幸の従兄弟にあたります。天正六年（一五七八）に九州の覇権をかけて、大友氏と薩摩国（現在の鹿児島県）の島津氏は「耳川の戦い」で激突しました。この戦いで惨敗した大友氏は数多くの家臣を失い、統幸の父・鎮信も討死しました。以後、急速に勢いを失っていく大友家を支えるため、弱冠十五歳で統幸は吉弘家の家督を相続します。



屋山山頂（屋山城跡）からの眺望

統幸の最初の大仕事は、屋山城の改修でした。耳川の戦い以降、勢いが衰えて不安定となった大友領内の守りを固めるために、統幸は屋山城の整備を行ったのです。

屋山城は豊後高田市内で、最大規模を誇る山城です。独立峰のため眺望がよく、地域一帯を見渡すことに適した城です。城の全長は四〇〇m程

で非常に細長い形をしており、段差のある多数の曲輪によって構成されています。これを連郭式山城といいます。天正七年（一五七九）に主君・大友義統が出した書状を要約すれば「屋山城の改修について、統幸が油断なく行っているのは、随一の働きである。日々気を緩めないことが大事である。」とあります。統幸に対する義統からの厚い信頼がうかがえます。

その後も統幸は武勲を重ねました。朝鮮出兵の際には、豊臣秀吉から拔群の武勇を有する者しか持つことを許されない「皆朱の槍」を賜ったと伝えられるほどの戦いぶりでした。

一方、主君・義統は朝鮮出兵での不手際から秀吉の怒りを買った、ついに改易（城や領地を没収されること）となります。主



石垣原古戦場・吉弘統幸陣所跡（別府市）

君を失った統幸は都甲の領地を失い、浪人することになってしまいました。しかし、その武将としての能力は広く知られており、すぐに中津の黒田官兵衛に招かれ、その後は柳川の領主であった従兄弟の立花宗茂に二千石の待遇で仕えることになりました。

慶長三年（一五九八）、豊臣秀吉が亡くなり、天下は秀吉の子・秀頼を立てる西軍と、徳川家康を擁する東軍に二分されることとなります。翌年、秀吉によって幽閉されていた大友義統は解放され、豊後一国を拝領することを条件に西軍につくことを約束してしまいます。

江戸時代初期に書かれた軍記物によれば、統幸は義統の子能乗（東軍）に協力するために江戸に向かう途中、上関（山口県）で西軍に付いて豊後で挙兵することを決めた義統と出会います。

統幸は東軍につくよう義統を説得しますが、聞き入れられませんでした。敗北を予感する統幸でしたが、それでも主君への忠義から義統に従い、船を別府まで



吉弘統幸の墓（金宗院跡・都甲）

出して国東半島南部の攻略を行います。しかし中津城の黒田官兵衛が大友氏撃破の為に数倍とも言われる軍勢で別府に向かっている事を知ると、石垣原を見渡せる別府坂本村に陣を張って黒田軍を迎え撃ちます。これが世に有名な石垣原合戦です。

大友軍は少勢でしたが、統幸や宗像掃部の奮戦によって一時は黒田軍を追い詰めます。しかし、統幸は井上九郎右衛門との一騎討ちに敗れて戦死してしまい、勢いを失った大友軍はついに降伏します。

統幸の死は多くの人の心を動かしました。統幸と戦った黒田家では、その歴史を記述した『黒田家譜』において、石垣原合戦について詳しく述べたのち、統幸について「吉弘がごとき真の義士は、古今たぐいすくなく事なり（吉弘のようなまことに義に厚い武士は、今も昔も少ないことだ）」と絶賛しています。

現在、都甲には吉弘氏の菩提寺であった金宗院跡があり、統幸の墓もあります。

【戦国乱世を生き抜いた名将】

たちばな 宗茂
むねしげ

永禄十年（一五六七）
寛永十九年（一六四三）

柳川藩主立花宗茂は、豊後高田市都甲出身の戦国武将です。

戦国時代後期の九州は、大友氏と島津氏、そして龍造寺氏が覇権を争っていました。北部九州を大友氏、南を島津氏、西九州を龍造寺氏が支配していました。さらに山口の毛利氏も九州をねらっていました。大友氏の有力な武将の高橋紹運と立花道雪が重要な港である博多を守っていました。紹運は、都甲の吉弘鑑理の次男として生まれました。大友家家臣の高橋鑑種の



寛城跡伝承地

（立花宗茂はここで生まれ、少年期を過ごしたとされる）

謀反をおさえることに成功し、軍功をあげると吉弘家の次男であったため、大友宗麟に命じられ、高橋氏の名跡を継ぐことになるのです。このとき高橋紹運と名乗るようになったと言われています。立花道雪とともに大友氏の北部九州支配の先頭に立って肥前・筑前・

筑後を支配することになります。太宰府の岩屋城に砦を築きました。立花道雪は戸次鑑連のことで、大友氏の家臣ですが、「二階崩れの変（大友家の家督争い事件。この後、大友宗麟が家督を継ぐことになる）」から、道雪は宗麟を一貫して支持すると共に、毛利氏の筑前侵攻を白杵鑑速・吉弘鑑理（紹運の父、吉弘統幸の祖父）らと十年以上に渡って防ぎ、毛利氏は撤退します。この功績により博多市街を一望できる立花山（三六七m）に立花城を築くこととなります。そして、男子の跡継ぎがなかった立花家の養子になるのが高橋紹運の子である立花宗茂なのです。

毛利氏は退けた大友氏ですが、島津氏の侵攻が始まります。衰退しかけた大友を最後まで支えたのが高橋紹運と立花道雪です。宗麟は豊臣秀吉の配下となることに決め、島津に対抗する援軍を求めることになります。しかし、秀吉の援軍が来るまで持ちこたえなければならず、高橋紹運は、二千の兵を率いて岩屋城に立てこもり二万の島津軍を対峙します。持久戦となり島津軍四千を滅ぼしたとも伝えられています。最後には、全員が岩屋城で玉碎しています。この時、十歳年上の立花道雪も病死しています。岩屋城を落とした島津軍は、立花宗茂のいる立花城を攻めますが、宗茂の巧みな攻撃で島津軍を苦しめ、秀吉の援軍がやってきます。

秀吉の九州征伐での活躍が認められ、筑後柳川（十三万二千

石)を与えられ、秀吉直参の大名になっているのです。なんとこの時、十九才であったと言われています。大友義統は部下である立花宗茂の働きにより、「秀吉」の「吉」を名前に使うことを許され、これ以降、大友吉統と名乗るようになります。しかし、前述のように朝鮮出兵の失態で吉統は改易され、家臣たちは路頭に迷うこととなります。その一人が吉弘統幸ですが、宗茂は大名であったため、従兄弟の統幸を召し抱えることができたのでした。

「その忠義、武勇も九州随一」と高く評価され、「東の本多忠勝、西の立花宗茂という天下無双の大将がいる」と小田原攻めでは、諸大名の前で豊臣秀吉が褒め称えたそうです。朝鮮出兵でも大活躍で「立花家の三〇〇〇は、他家の一万に匹敵する」と言われたそうです。

関ヶ原の戦いでは、大友氏一族であることや「豊臣への恩顧がある」と言って、西軍につき、改易され浪人となってしまいます。しかし、人望も厚く、文武両道の名将で、連歌、茶道、狂言などにも長けていたことから、徳川秀忠や本多忠勝の世話により江戸城に召し出されます。宗茂の実力をよく知る家康から五〇〇〇石で將軍の親衛隊長(御書院番頭)にとりたてられています。その後、大阪の陣で活躍し、柳川(約十一万石)藩の大名に返り咲いているのです。関ヶ原の改易後、大名として旧領に復帰した唯一の武将です。戦上手、常に温厚で誠実、義



立花家の別邸だった「御花」(柳川市)

理堅く正直なことなどから「武士の中の武士。彼こそが侍」と言われています。

立花宗茂と伊達政宗は同い年で、昔話を聞かせたりする徳川家顧問を務めています。宗茂の息子である忠茂に正宗の孫娘が嫁いでいます。現在、柳川は「川下り観光」で賑わっていますが、最終地点にある料亭「御花」は、もとは

立花家の別荘ということでした。

たぐいまれなる高橋紹運・立花宗茂親子を育んだのは、都甲の吉弘家でした。宗茂は小さい頃、従兄弟の吉弘統幸とともに筑城、屋山城などの都甲荘で遊んでいたということです。関ヶ原の戦い後の「柳川城攻防戦」では、筑後四郡の領民たちから「殿のためなら命も惜しまない」と涙ながらに降伏開城を思いとどまらせようとしたそうです。しかし、宗茂は「気持ちには嬉しいが、皆を戦乱に巻き込みたくない。わかってほしい。」と答え、領民たちは大泣きしながら見送ったと言います。領民から慕われ、信望があつかった宗茂の忠義や相手への思いやりの心は、従兄弟の統幸と同じく都甲の地に根付いた武士の魂と言えるものなのです。

【江戸時代の大数学者】

よしだ みつよし
吉田 光由

慶長三年（一五九八）
寛文十二年（一六七二）

みなさんは、吉田光由という人物を知っていますか？

吉田光由は『塵劫記』という数学の本を書いた江戸時代の日本の大数学者です。この本には、かけ算の九九、そろばんの仕方、それに数学的な楽しい問題などがたくさん絵入りで載せられていました。そして、基礎から応用までわかりやすく学習できる数学を学ぶための手本となるものだと評価が高かったです。そのため、江戸時代の多くの人々に親しまれ、大変な売れ行きだったようです。

この本は江戸時代の多くの学者に影響を与えたことでも知られており、後の和算の大家となった関孝和や儒学者の貝原益軒なども『塵劫記』を用いて数学を学んだことがわかっています。また、この本は時代が変わり、明治時代になっても、政府がつくった数学の教科書の手本にされたほどのものでした。

私たちの身近なところでは、「一」「十」「百」「千」「万」から四桁ごとに「億」「兆」「京」「垓」「杼」「穰」「溝」「澗」「正」「載」「極」「恒河沙」「阿僧祇」「那由他」「不可思議」「無量大数」と名前が変わる位取りを考えだしたのも吉田光由

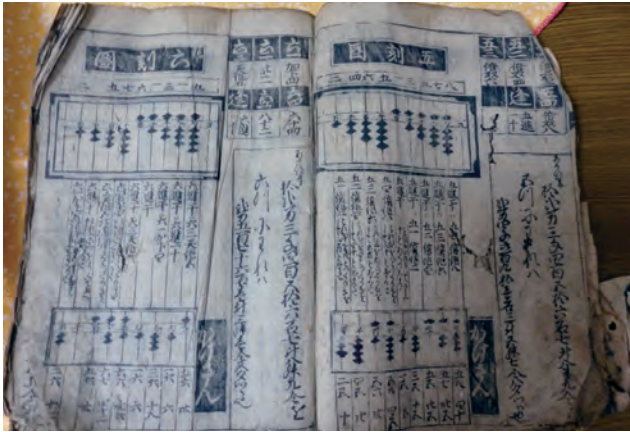
の業績です。

光由は、慶長三年（一五九八）に京都の大貿易商の息子として生まれました。一族には水路や川の工事技術を持つ人が多く、数を扱う環境の中で、幼いころから数学が大好きだったそうです。晩年は、熊本の細川氏に仕えていましたが、それを辞退して、各地を旅して歩くことが多かったそうです。

その旅の途中で、香々地荘夷の風景が気に入り、この地に住むようになりました。そして「稽古庵」という名前をつけた住まいに、村の子どもたちを集めて、数学を教えました。光由の弟子であった渡辺藤兵衛も、光由を慕い、師をさがし求めて夷の「稽古庵」に來ました。そして、七五歳で光由が亡くなったあと、夷の台林というところに墓をたてて、三〇年あまりも光由の意思をつぎ、村の子どもたちに数学を教えたといわれています。



伝・吉田光由墓（市指定史跡）



吉田光由・著『塵劫記』(部分)

■油わけ算

【問題】

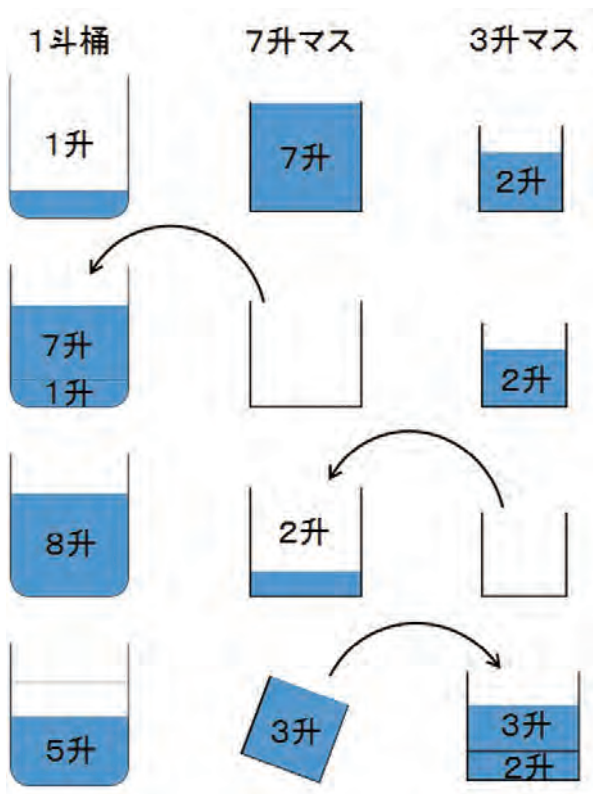
ます。そして彼の墓も光由の眠る夷台林だいはやしにたてられています。台林には、豊後高田市教育委員会が設置した説明書きがあります。しばらく坂道を山中にのぼると吉田光由の墓が墓地の一等地にあり、少し下に弟子の渡辺藤兵衛の墓もあります。現在は、この言い伝えを聞いた珠算関係者しゆざんなどが多く訪れています。光由の書いた『塵劫記』に油わけ算という楽しい問題がのっていますので紹介します。みなさんもぜひやってみてください。

「二斗いっとおけ桶に油が一斗(＝十升)ある。これを二人で分けるのだが、七升しちやうマスと三升マスしかない。この二つだけで、五升ずつ等分するにはどうすればよいか？」

【解き方】

①まず、三升マスで三回、七升マスに油を入れます。
②すると、三回目の三升マスには、七升マスに入りき

らなかつた二升が残ります。
③そこで、七升マスの油を一斗桶いっとうに戻し、三升マスに残った二升を七升マスに移します。
④もう一度、一斗桶から油を三升マスに入れて、これを七升マスに加えます。
⑤すると、七升マスと一斗桶にそれぞれ五升ずつあることになるので、等分出来ました。



【呉崎新田開発に生涯をささげた開拓者】

しおのや
塩谷 大四郎

明和六年（一七六九）
〜天保七年（一八三六）

今から二百年ほど前の江戸時代のことです。江戸から日田代官として赴任した塩谷大四郎は、このころ宇佐・国東あたりの遠浅の海岸で、干拓による新田開発を進めていました。ある時、大四郎は管内の見回りをするため、国東の伊美方面に向かっています。昼ごはんを食べるために立ち止った呉崎の海岸で、「この呉崎の干潟を干拓しよう。そうすれば大きな新田ができる。」と思いつきました。大四郎はこれより少し前に、江戸から日田に来る途中、備前（今の岡山県）の干拓を見ており、この地形と呉崎がとても似ていたので、これならできると確信



塩谷大四郎正義像（廣瀬資料館・蔵）

したからです。文政十一年（一八二八）、いよいよ干拓工事が始まりました。しかし、この工事には莫大な費



廣瀬久兵衛像（廣瀬資料館・蔵）

を思いつきました。当時、三八一人もの人が出資することになりました。しかし、中にはお金がなくて困る人もおり、「この干拓地は島原藩の領地なので、島原の人にもお金を出してもらいたい。」と言いつき出する人もいたそうです。

また、この干拓工事が終わるまでに三十三万人もの人が作業にあたったといわれています。その中で、これらの大勢の作業員を取りまとめ、仕事を教えながら工事を進めていったのは廣瀬久兵衛という人でした。久兵衛は日田で多彩な能力を發揮し、多くの社会貢献と地域振興を果たした人物で土木工事の知識もあつたので、大四郎は迷わず久兵衛に干拓工事を命じました。久兵衛は大四郎の期待に応え、色々と研究を重ねながら干拓工事を進めていきました。しかし、この工事には七年もの長い年月がかかったので、作業員として働く農民たちは辛い仕事

用と人手が必要でした。そこで大四郎は、今のお金で十五億円もかかったといわれる干拓工事の費用を日田郡の商人や豪農（大金持ちの農民）に出資させ、開拓した新田はその人たちの所有とする方法



呉崎新田干拓の様子を描いた絵馬（産土神社）

に弱音をはく者もいました。今のようにブルドーザーもパワーシヨベルもない時代なので、全てが人の力が頼りでした。海水を止めるにはものすごい量の石や土が必要で、それを運ぶ作業は大変困難なものでした。特に呉崎地区は遠浅のため、引き潮の時は大きな干潟ができるのですが、満潮の時には一気に海岸線まで潮が満ちてきます。一日に二回干潮・満潮があるので作業できるのはほんのわずかな時間です。その間に堤防を作ってしまったわけにはいかなかった。一日に二回干潮・満潮があるので作業できるのはほんのわずかな時間です。その間に堤防を作ってしまったわけにはいかなかった。一日に二回干潮・満潮があるので作業できるのはほんのわずかな時間です。その間に堤防を作ってしまったわけにはいかなかった。

干拓工事が終わり、成後の土地への最初の入植者は安芸（今の広島県）からの一家でした。その後広島を中心に山口・島根・岡山・大分と、多くの県から入植する人が増え、明治元年（一八六八）には呉崎に二五三戸・千〇九九人が住むようになりました。これらの入植者によって次第に田畑の開墾が進



塩谷大四郎石像（産土神社）

むと、大四郎は検地（土地の広さや収穫高・耕作者等を調査し、年貢等の基準にするもの）を行いました。文政十一年（二八二八）、大四郎が国の利益のためと貧しい人々を助けようと推し進めてきた呉崎地区の干拓事業は、様々な不平不満も聞かれましたが、年月を重ねるに従って当初の目標に一步一步近づいて行ったのでした。このようにして大干拓地造成に力を注いだ塩谷大四郎は、その後、村人の心よりどころとなるよう、「産土神社」を創りました。村の人々は大四郎に大変感謝し、神社境内に神社「塩谷社」を創りました。さらに後年、その「塩谷社」脇に塩谷大四郎の石像も建立されました。大四郎がいかに村の人々から慕われ、尊敬されていたかが伝わってくるようです。また、産土神社拝殿には今でも干拓の様子を伝える「汐留」の絵馬が奉納され、長い年月の人々の苦勞とこの干拓工事を立ち上げた塩谷大四郎を忘れず祭っています。

【幕末三大本草学者―近代植物学の父】

賀来 飛霞

文化十三年（一八一六）
〜明治二七年（一八九四）

賀来飛霞は、幕末の三大本草学者の一人で、「近代植物学の父」とも言われています。

「本草学」とは中国古来の植物を中心とする薬物学（不老長寿の薬を研究するために生まれた学問）で、自然物の中で何が薬として利用できるのかということを研究する学問でした。中国で生まれたこの学問は、奈良時代以前に日本に伝わってきたといわれています。やがて本草学は、自然界のあらゆるものを研究対象とした博物学となっていきました。



賀来飛霞 肖像（個人・蔵）

飛霞は文化十三年（一八一六）島原藩医・賀来有軒の三男として国東郡高田村（現在の豊後高田市）で生まれました。父の有軒は豊後高田市で医者としての評判が高かったのですが、飛霞が二歳の時に亡く

なりました。飛霞の兄・佐之は、父と親交の深かった儒学者・帆足万里に学び、その後、長崎でシーボルトから医学を学び、父と同じく医者となりました。

飛霞もまた五歳から万里に入門し、兄と共に万里の教えを受けて成長しました。飛霞は万里から医学と共に本草学も学びました。

本草学は、野山に自生する植物や小動物、昆虫などの自然が研究対象であり、それらを自分の目で観察し、正確に描きとめておく必要があります。しかし当時、写真機はまだ伝わっておらず、絵を学ばなければ真実を書き残すことはできないと強く



賀来飛霞植物写生図「シキントウ図」
（大分市歴史資料館・蔵）

感じた飛霞は、杵築藩の画家・十市石谷に写生画の技法を学びました。

幼いころから絵を描くのが好きだったこともあって、飛霞は順調に画才を伸ばしていきました。研究のために生涯にわたって描き続けた写生図は三〇〇〇枚に



現在の小石川植物園

ものぼると言われていますが、特に花の絵に優れ、標本以上の美しさと存在感があると高く評価されています。対象を正確に描くことに徹底してこだわり、当時の本草学ではあまり見向きもされなかった植物の「根」の部分まで細密に描いているところからも、飛霞の目が「薬草」ではなく「植物そのもの」に注がれていたことがうかがえます。

飛霞は、天保五年（一八三四）十八歳のとき、兄と共に京都へ行き、本草学の大家・山本亡羊に学びました。以後、飛霞は亡羊の教えに従い、九州はもとより近畿、東北、北陸、甲信越各地を現地調査し、採薬記や多くの動植物写生図を残していま

す。また、行く先々で著名な学識者を訪ね、教えを受けており、飛霞の学問に対するひたむきさをうかがい知ることができます。安政四年（一八五七）飛霞は兄の死後、亡き兄に代わって島原藩医となりました。翌年に大流行したコレラの治療に功績を挙げ、藩主

から褒賞を受けています。明治維新後の明治九年（一八七六）には、宇佐郡公立四日市医学学校校長と同病院長を務めました。明治十一年（一八七八）には伊藤圭介に招かれ、東京大学附属の小石川植物園の植物取調係になりました。伊藤は、「おしべ」「めしべ」「花粉」という言葉を作り、後に日本初の理学博士になる人物です。飛霞は明治十四年（一八八一）に、伊藤と共に『東京大学小石川植物園草木図説・巻一』を出版しました。これは日本で二番目の植物図鑑でしたが、植物の解説はすべて飛霞が描いたものです。

明治十九年（一八八六）に小石川植物園を退職した飛霞は、故郷に帰り、絵を描いたり、植物学の研究をしたりしながら穏やかな生活を送り、明治二十七年（一八九四）七八歳の生涯を閉じました。

幕末から明治にかけての激動の時代の中で、飛霞が没頭してきた観察記録などの植物に関する実物調査の成果は、日本の本草学を大成させ、近代植物学の基礎の確立に大きく貢献しました。先に登場した伊藤圭介、植物図鑑『草木図説』を出版した飯沼慾齋と共に、飛霞を含めた三人を我が国の「幕末三大本草学者」と評価されるようになりました。

【私塾「涵養舎」主宰―多くの門弟を教育】



おしろうみ 量容

文政二年（一八一九）
〜明治二十九年（一八九六）

「入津の里は学舎を世に先がけて開かれた 量容翁の誕生地 その教えを手本とし

われらは知恵をみがきましよう ああ草地 草地小学校」と草地小学校校歌に歌われている 駕海量容は豊後高田市で有名な教育者で、草地入津地区に私塾「涵養舎」を開設しました。高田中学校校歌には「かんようの学舎の風を慕いつつ」とも歌われています。天保十四年（一八四四）の創設から明治二十三年（一八九〇）の閉鎖まで、四七年間の門弟の数はおよそ三〇〇〇人と推定されています。

駕海量容は文政二年（一八一九）に父・太右衛門と母・美和の五男二女の長男として草地入津に生まれました。幼い頃から周囲からもその才能を認められた人物でした。天保三年（一八三二）量容十四歳の時、豊前の上毛郡薬師寺村の漢学者である恒遠醒窓の私塾「求溪舎」で天保十一年（一八四一）までおよそ十年間、漢学（中国の先進的な学問）を学びました。また、関西随一と言われた大坂・江戸堀の儒学者篠崎小竹の塾「梅花社」に入門して宋学、書道、詩学なども研究、研鑽し



涵養舎跡（豊後高田市指定史跡）

ました。

その後、帰郷して私塾の設立計画を作成し、教育方針や学科、課程とその内容、諸条件を定めて近隣の子弟の募集を始めました。そして、弘化元年（一八四四）正月より授業が始まりました。この時、量容は弱冠二五歳でした。本格的

な教育体制を作り上げ、私塾の運営のみならず、量容自身も教鞭をとって後進の教育に心血を注ぎました。

「涵養舎」では学習の全課程を上中下の三等に大別し、さらに各等を一、二、三の三級に細別していました。新入生は入門時、下等三級に位置づけられ、大試験を合格することに進級し、下等一級を修了した者は、中等三級へ昇級する仕組みでした。試験は毎月一回ずつ行われました。読み方、解釈、口頭試問、討論等によって採点され、丸暗記ではまったく通用せず、教科書の内容・意味をしっかりと理解していることが大切とされていました。塾生の年齢は十二歳から二〇歳でした。

学問の深さと、教育に対する情熱は近隣にも聞こえ、地元高田をはじめ東西国東・宇佐・速見郡はもとより、福岡・長崎・山口・広島など遠方からも向学心に燃える若者たちが続々と集まってきました。

明治元年（一八六八）量容と弟・元貞の二人の篤学を聞いた肥前・島原藩主の松平侯は兩名を抜擢し、量容を藩校明親館の塾頭である都講に任命しました。このため量容は島原に移住することになりました。量容五一歳でした。このため不在中の「涵養舎」の教務を弟・潤（陽谷）に引き渡し、約四年間、島原の明親館で藩士の子弟を教授しました。

明治五年（一八七二）量容は次第に視力が低下し、文字が見にくくなったので、都講をやめて草地の地に帰郷し、「涵養舎」の総長の座に戻りました。塾生は量容を老先生、陽谷を若先生と呼んで親しみと尊敬のまなざしを持って師として仰いでいました。

明治十年（一八七七）、塾の公的認可を得るために「私塾開業願い」を大分県権令・香川真一に申請し、受理されました。時代の要求を察し、教師を動員し、漢学のほか算数等の普通学科も教え、学生数はさらに増加して舎屋も増築され「涵養舎」は高等私学府と称されるまでになりました。

明治二九年（一八九六）量容は七八歳でその生涯を閉じましたが、門人の中には横田国臣（検事総長、大審院長）、金谷範三（陸



篤海量容先生 寿碑

軍大将、陸軍参謀総長）、川面凡児（神道の大家）、山田珠一（熊本市長、衆議院議員）などを育て、たくさんの俊英を世に送り出しました。

現在、草地地区には「涵養舎」跡地や、量容先生の寿碑がのこっており、地元の人たちによって大切に守られています。

【ふるさとに電灯を灯す】

のがみ きくたろう
野上 菊太郎

明治十一年（一八七八）
昭和九年（一九三九）

現在、私たちは、あたりまえのように電気を利用して、電灯やテレビ、冷蔵庫、クーラーなど多くの電気製品を使い、快適な生活ができています。電気がない生活なんて考えられません。この電気が日本で普及ふきゅうしていくのは、明治時代の西欧せいおうの進んだ文化や、技術を生生活に取り入れる文明開化の時代からです。そのきっかけとなったのは、明治十五年（一八八二）に日本初の電灯（アーク灯）が東京の銀座に灯されてからです。当時の人々はあまりの明るさに驚おどろき、連日、大勢の人が見物に訪れました。それ以後、東京を中心とした大都市から地方へと普及していききました。

大分県では、明治三三年（一九〇〇）に竹田市に初めて電灯が灯されました。私たち豊後高田市は明治四三年（一九一〇）五月に、高田の中心部に柳ヶ浦やなぎがうらの火力発電所の送電によって初めて電灯が灯されました。それから大正五年（一九一六）に呉崎、大正七年（一九一八）に河内、大正十年（一九二二）に真玉、香々地に、大正十二年（一九二三）に都甲へと普及していききました。田染では大正十一年（一九二二）に田染川の水力を利用

した水力発電が始められ、各家庭に送電を開始しました。この電気の普及に努力をした人が野上菊太郎でした。

野上菊太郎は、野上翠造すいぞうの三男として明治十一年（一八七八）九月八日に西真玉の大村に生まれ、幼いときから勉強が好きで、よく本を読み、小学校の時から「秀才しゅうさい」と呼ばれていました。小学校を卒業して、大分中学校（現在の大分上野ヶ丘高校）に進学しても勉学べんがくに励み、特に数学や理科が得意で、この中学時代に電気に興味を持つようになり、将来は電気技術者になることを夢見て、熊本の第五高等学校（現在の熊本大学）に進学し、猛勉強もうべんがくの末、東京帝国大学工学部電気学科（現在の東京大学）に合格しました。大学では当時の最新の電気に関する学問を学ぶことができました。

明治三六年（一九〇三）に同大学を卒業した菊太郎は、当時の大企業きぎやうである住友すみともが持つ別子銅山べっしどうざん（愛媛県新居浜市）の技術者として働くようになりました。当時の別子銅山は、栃木県の足尾銅山あしお、茨城県の日立銅山ひたちとともに日本三大銅山の一つで、日本の近代化を進める原動力となっていました。菊太郎は大正二年（一九一三）、三五歳の時にヨーロッパの進んだ電気技術や事業を学ぶためにドイツに渡わたりました。ドイツの先進的な電気事業を見て驚くとともに、自分も電気事業の会社わいせを興おこすことを決意します。

日本に帰った菊太郎は、会社をやめ、大正四年（一九一五）



野上家の家族写真（個人・蔵）
（左手前が父・翠造、右奥が菊太郎）

に大阪北浜に野上工業所をつくり、電気事業や電気器具の製造にあたりました。当時の日本は全国各地に電気の普及が進み、各家庭に電灯が灯されるときであったため会社は順調に伸びていきました。

そんな中、故郷の真玉に帰ると、電灯はおろかカンテラ（石油ランプ）や、貧しい家では、江戸時代からの行灯あんどんを利用してのありさまでした。カンテラは一日灯すと石油のススでまっ黒になり、毎日ガラスを磨みがかないと使えませんでした。そんな故郷の人々の生活の様子を見て菊太郎は故郷に帰り、電気の普及に力を注ぐことを決意します。

そして、菊太郎が四二歳（大正九年）の時に故郷に帰り、真玉電気株式会社（後に豊後電気株式会社と改称かいしょう）をつくり、早速、電線を引く工事に取りかかりました。しかし、貧しくて工事を払えない家庭も多く、反対する人もいましたが、菊太郎の粘り強い説得と援助えんじょにより工事は進み、ついに大正十年（一九二二）、真玉、上真玉、白野、三浦の各家庭に電灯を灯すことに成功しました。人々は電灯が灯るとその明るさに驚くとともに、菊太郎への感謝の涙なみだを流したと言われています。

また、工事の人々に正午の時間を知らせるために、日本で初めてサイレンを鳴らしたのも菊太郎と言われています。

しかし、故郷を愛し、電気の普及に努力をした菊太郎ですが、昭和九年（一九三四）八月一日、突然倒れてそのまま亡くなってしまいました。多くの人々が菊太郎の突然の死を悲しみ涙しましたが、故郷への菊太郎の強い想いは消えることなくいつまでも、電灯のように光り輝かがやいているのだと思います。

【豊後高田の「近代化」に大きく貢献】

野村 礼次郎

嘉永元年（一八四八）
〜昭和四年（一九二九）

日清戦争（明治二七年（一八九四）〜二八年（一八九五））のあと、日本は軍備の拡張と産業の振興を中心に経済界は好景気に恵まれました。その結果、全国各地には新しい富裕層が次々と台頭し、日本資本主義の基礎が形作られていくこの時代、豊後高田にあつて経済的にはもちろん政治的にも大きな影響力をもったのが、野村礼次郎・力蔵・市夫の三代にわたる「野村財閥」でした。当時、大分県内でも屈指の財力を誇っていたといわれています。

「野村財閥」の初代・礼次郎は江戸時代後期の嘉永元年（一八四八）十一月十九日に白野村（現・豊後高田市白野）に生まれ、新町の野村ミテの入り婿となり、呉服商「甲斐屋」をつぎました。礼次郎が呉服の商いで成功したことと、日清戦争後の物価高騰で財をなし大地主となりました。さらに多額納税者が公表されると、礼次郎の名は一躍近隣に知られることとなり、「野村財閥」の勇名は不動のものとなつていきました。

明治四十五年（一九一二）には、この豊かな資金力を背景に銀行事業に進出し、礼次郎が自ら取締役頭取となつて新町に株



旧共同野村銀行社屋（国登録有形文化財）

式会社共同野村銀行を設立しました。ところで、現存している旧共同野村銀行「現・清照別館」は、昭和八年（一九三三）に三代目・市夫が建設し、平成二十二年（二〇〇九）六月十九日、豊後高田市では初めての「国登録有形文化財」に登録されています。

大正三年（一九一四）六月、ヨーロッパを主戦場として第一次世界大戦が勃発しました。ヨーロッパ諸国からの物資の注文や、アジア市場への輸出が急増したため、大戦は日本に空前の好景気をもたらしました。その結果、市場の急速な拡大によって、産業界はにわかに活気付きます。とりわけ、養蚕・製糸業



旧高田農業倉庫・北蔵（国登録有形文化財）

の発展はめざましく、生系の生産は急速に拡大していきました。豊後高田においても、大手工場の相次ぐ進出によって、その恩恵を受けることとなりました。

共同野村銀行でも大戦景気の勢いに乗って、盛んに産業界に資金を供給しました。特に、大正六年（一九一七）の豊中製糸高田分工場の開設をはじめ、養蚕・製糸業など地域産業の振興に果たした共同野村銀行の貢献は大きかったのです。当時、「絹は日本の経済の防波堤」といわれたように、礼次郎は絹（生糸）の輸出という最も重要な外貨獲得の一翼を担っていました。さて、高田の中心市街地に位置し、現在は「昭和の町」の中心施設として多くの観光客で賑

わっている「昭和ロマン蔵」も、「清照別館」と並び、かつての「野村財閥」の賑わいぶりを今に伝える建物です。元々は、昭和十二年（一九三七）に建設された「高田農業倉庫」です。この倉庫群は野村家が小作米を収蔵するために設営した米蔵群でした。当時の野村家が小作農に貸付けた小作地は、大分県北一帯の西国東・宇佐・下毛三郡にまたがる三六〇町歩、納められた小作米は年間一万俵にもなつたといえます。米俵一俵は約六〇キログラムですから、一万俵だと約六〇〇トンの大量の米が、倉庫に隣接していた宇佐参宮鉄道などを利用して運ばれてきたのです。当時の豊後高田の街の賑わいと、その原動力の中心であった「野村財閥」の大きさが想像できます。

また野村家には、「政治と経済はハッキリと区別する」という守るべき教えがありました。すなわち、資金面については政党と深く関わりましたが、政党幹部の強い勧めを拒絶し、帝国議会はもとより県会や郡会、町会の議員選挙に出馬することはありませんでした。

一方で、学校建設をはじめ多くの公共物の建設にあたり私財を供与するなど豊後高田の繁栄に大きく貢献した礼次郎でしたが、昭和四年（一九二九）一月三十日、八十二年の生涯に幕を閉じました。野村家の事業はその後、二代力蔵と三代の市夫によって引き継がれていきました。

【努力と信念の弁護士・政治家】

ひとつまつ
一松 定吉 さだよし

明治八年（一八七五）
～昭和四八年（一九七三）

一松定吉は明治八年（一八七五）、西国東郡美和村（現在の豊後高田市美和）で神職しんしよくをしながら小学校の教師をしていた父波多宗直はたむねなおと母マサの次男として生まれました。波多家は、定吉の他に兄と妹がおり、大変貧しい家庭で育ちました。

少しでも家計を助けようと、彼が十五歳さいの時、西国東郡立高等小学校の自修科に在学しながら波多方尋常はたかたじんじよう小学校の代用教員として働き始めました。



一松定吉像（若宮八幡神社前）

その後、准訓導じゆんくんどう登用試験とうようしけんに合格し、高田尋常小学校（現在の桂陽小学校）の准訓導じゆんとして勤務しました。

彼の優秀ゆうしゆうさが、准訓導登用試験の試験官をしていた大分師範おひ学校の小中こなか文三郎先生ぶんざぶらうの目に止まり、

「君は大変よい成績であったが、准訓導ぐらいで満足してはいけない。将来ずっと教育たういくに携わってゆくつもりならば、師範学校に行って正教員の資格を取っておくほうがよいと思う。是非ぜひそうしたまえ」と勧めてすす下さいました。

この誘いを受け、定吉は「将来は教育者として身を立てよう」と思うようになり、猛勉強もうきゆうの末、大分師範学校に入学することができました。西国東郡では唯一ゆいいつの合格者でした。

しかし入学して間もない頃、講義中に先生と歴史の考え方について激しい口論となり、理不尽りふじんにも退学処分しよぶんとなりました。

この出来事が、定吉の人生の大きな転機となりました。退学処分によって教育者としての進路を阻はばまれましたが、「世のため人のためになる仕事をしたい」という思いが強く、よく考えた末、裁判官を志すことになりました。

明治三二年（一八九九）、明治法律学校（現・明治大学）に入学し、昼間は浅草育英小学校の訓導として勤務し、勤務後は、学生として寸暇すんかを惜おしんで勉学べんがくに励はげみました。四年後、晴れて判検事試験に合格し、長崎を皮切りに、横浜・大阪等の検事を



一松邸（杵築市：昭和32年杵築市に寄贈された）

務め、最後は大審院検事となりました。

在職中は、「罪無きは罰せず、疑わしきは罰せず」といわれる刑事裁判の原則を堅く守りました。そして、「法律を犯す人を取り締まり、悪人を検挙することは、すなわち多くの国民を守り、法律の権威を守り、国家の秩序を維持するわけだから、検事の任務というものは重大である」との信念から、数多くの

汚職事件や選挙

違反の摘発に

奔走し、「鬼検

事」の異名をと

る事となりました。

大正九年

（一九二〇）に

退官し、大阪市

で法律事務所を

開設し、弁護士

として活躍しま

す。かつて、彼

から起訴され有

罪判決を受けた

人やその人の紹

介で相談に来られる人も多く、忙しい日々を送りました。

さらに、「社会悪と闘うのも尊いが、自ら一身を直接政界に投じて、清く正しい政治家になると共に、進んで政界の浄化に尽くしたい」との思いから、大正十四年（一九二五）に大阪市

議員に、昭和三年（一九二三）には衆議院議長に、そして昭

和二年（一九五〇）からは参議院議員として、国民のために

尽力されました。

特に戦後の混乱期において、逋信・厚生・建設大臣を歴任し、

憲法改正や諸法案の制定・国民生活向上に向けた施策、労働組

合との折衝などに関わってきました。また、日本進歩党という

政党の幹事長も務めました。

これまでの数々の功績に対して、定吉は表彰や叙勲をいただ

いています。

さらに、郷土・豊後高田市にも多額の私財を寄贈し、市政発

展に尽くしました。昭和四一年（一九六六）には豊後高田市の

名誉市民となり、昭和四八年（一九七三）、多くの人に惜しま

れながら九八歳で他界しました。

【「天魔の楼」と呼ばれた加礼川を開拓】

応仁

生没年不詳

六郷満山の寺々がまだ栄える前のできごとです。長安寺には多くの僧侶たちが暮らしていました。長安寺のあった屋山は土地が狭く、水も少なく、あまり多くの田畑がありませんでした。そのため、寺は貧しく、仏事を執り行い、僧侶達を養うのに十分な食料がありませんでした。

そこで長安寺の高僧であった応仁は、屋山の山裾、加礼川の流域に水田を開くことを考えました。しかし、当時の加礼川は「天魔の楼」と呼ばれるほどの土地で、平坦な土地がなく、藪が覆い繁り、人が入るような土地ではありませんでした。

応仁は長安寺で仏事を行うかたわら、湧き水を見つけては水田を拓き、川の清流を田畑まで引く方法を考えました。そして鎌倉時代のはじめの頃には、加礼川の谷に多くの水田が完成し、長安寺の僧侶達が住むようになっていきました。十分な収入を得られるようになった長安寺はどんどん勢いづき、六郷満山最大の寺院へと成長していきました。

現在の加礼川地区にも河川に沿って細長い水田がずっと続いています。

【鎌倉時代を代表する刀鍛冶師】

紀行平

生没年不詳

現在、国宝に指定されている名刀（「豊後国行平作」と刻まれているものも多い）を数多く残した紀行平は、鎌倉幕府が開かれ、武士が活躍し始めたころ、夷山靈仙寺の学頭を務めていた父秀忠の子として生まれました。父のもとで刀鍛冶の技術を学びました。四〇歳のころ、罪を犯して上野国（現在の群馬県）に送られましたが、刀づくりの技を磨き続けました。罪を許されて豊後国にもどり、ふたたび刀づくりと弟子の育成に力をそそぎました。その後、行平の刀の注文が殺到したようです。そして、刀鍛冶としての腕が評判になり、承元二年（二〇八）に後鳥羽上皇によって御番鍛冶に召抱えられました。御番鍛冶とは全国の名人が朝廷の鍛冶職を月ごとに交代で務めたもので、香々地の人々にとっては大変名誉なことでした。その後、行平は七〇歳近くに夷にもどり、完全無欠の刀を作りたいと、一人で夷の鬼ヶ城の岩屋にこもり、自分の納得する刀を完成させました。



「太刀」
（大分県立歴史博物館・蔵）

【円福寺の開基とされる臨済宗の高僧】

大応国師（南浦紹明）

嘉禎元年（一二三五）
延慶元年（一二三〇）

市内玉津にある円福寺には、写真のような木像が伝えられています。鎌倉時代に活躍した臨済宗の高僧で、円福寺の開基とされる大応国師（南浦紹明）の像です。禅宗では「頂相」と言われて、写実的な高僧の肖像画や彫刻をつくり、仏様と同じように大切にしました。南浦紹明は駿河国（現在の静岡県）の出身とされ、幼い頃から仏教に親しみ、十五歳の時に鎌倉の建長寺の蘭溪道隆に学び、二五歳で中国に渡りました。帰国後、博多の崇福寺住持を務め、以後三〇年近くここで活躍しました。円福寺の開基は文永七年（一二七〇）とされるので、同じ頃に高田に來訪したのではないかと考えられています。



大応国師坐像（県指定文化財）

また、南浦紹明は中国から帰国の際、茶道具一式と茶に関する書物を持ち帰って中国の茶の方式を日本に伝えました。栄西とともに茶文化にゆかりのある僧としても多くのの人に親しまれています。

【田染荘の発展に努めた荘官】

田染 栄忠

生没年不詳

室町時代から戦国時代にかけての田染氏は、代々宇佐神宮の神主を務めた家柄でした。中でも田染栄忠は、一族の功績と実力が認められて、田染荘の経営を任せられた人物でした。

栄忠が荘園を管理していた時代は、せまい谷の中にどんどん水田が広がっていった時代でした。中でも栄忠が深く関わっていたのは大曲地区だとされています。地名のように曲がりくねった道を進むと、小さなお堂が見えてきます。このお堂に収められている薬師如来像は、栄忠が作らせたものです。

また、栄忠が住んでいた小崎地区にも彼の足跡が残っています。かつて田染氏の館があった延寿寺の鐘楼の隣に立つ石殿は、大分



延寿寺石殿（県指定文化財）

県北部にしかない珍しい石造文化財で、文化を大切にしたい栄忠が、当時の技術を結集して造らせたものでした。側面の柱部分には栄忠の名がしっかりと刻み込まれています。

【国東半島最大の反乱を起こす】

たわら ちかつら
田原 親貫

せいねんしじょう
生年不詳
く天正八年（一五八〇）

戦国時代の国東半島のほとんどは、大友氏の重臣・田原氏の領土でした。その頃田原氏の当主・親宏には子がありませんでした。親宏は遠縁にあたる豊前国京都郡（現在の行橋市）の長野氏から一人の若者を養子にとり、田原親貫と名乗らせ、田原家の跡を継がせようとした。

しかし、長年反抗的だった田原氏を滅ぼす絶好の機会だと考えた大友宗麟は、自分の息子の親家こそが田原家の跡を継ぐのに相応しいとして、親貫から領土を没収する命令を出したのです。堅い結束で結ばれていた田原氏の家来たちは、国東半島の各地で親貫の味方をしました。そして、親貫は河内の鞍懸城を堅固に造り替え、大友氏に反乱を起こしたのでした。



佐野鞍懸城跡

鞍懸城は石垣によって堅く守られており、合戦は十ヶ月にも及ぶ大規模なものになりました。しかし、最後は吉弘統幸らによって城を落とされ、宇佐に逃げる途中で、大友氏の家臣に討ち取られたとされています。佐野の「矢原」という地名は、鞍懸城の戦いの際、矢がよく落ちたことから名づけられたといわれています。

【敵からも賞賛された義に厚い武将】

たかはし じょううん
高橋 紹運

てんぶん
天文十七年（一五四八）
く天正十四年（一五八六）

高橋紹運は苗字こそ違いますが、吉弘一族の武将の一人です。元の名を高橋鎮理といました。若者の頃まで都甲で暮らしていましたが、大友氏の一族・高橋氏が滅亡すると、その跡を継ぐことを勧められ、太宰府の岩屋城を授かりました。その後は、立花道雪と共に九州北部の戦を転々とし、各地で大活躍していききました。

しかし、時代が変わり大友氏が島津氏に攻め滅ぼされようとしていた頃、紹運は岩屋城に立て籠もっていました。たった七六三人で、島津軍五万人を相手にしようというのです。紹運の死を惜しんだ島津氏家臣が、「キリスト教を信仰し、人民を惑わす宗麟に尽くすことはない。降伏して島津の味方をして下さい。」と懇願しましたが、紹運は「主が栄える時も、衰える時も、一命を懸けて尽くすべきだ。お前は島津が衰えた時に主を捨てて命を惜しむのか。」と答え、島津氏家臣は舌を巻いたといえます。

多勢に無勢の紹運の兵は、全員が岩屋城で戦死しました。しかし、果敢に戦う紹運の兵は島津の兵を三千人も討ち取り、島津氏の侵攻を遅らせる結果となりました。その間に大友宗麟は、豊臣秀吉に援軍を頼み、何とか生き残る事ができたのでした。

【九州最古の寺子屋「戴星堂」の創設者】

河野 次郎右衛門

生没年不詳

河野次郎右衛門は元武士でしたが、帰農して村長となりました。そこで、地域の子供たちを教育するために天正元年(二五七三)東都甲の二畑村に私塾・寺子屋「戴星堂」を開きました。戴星堂は全国でも屈指の古さを誇り、九州最古の寺子屋とも言われています。

次郎右衛門以降、代々の当主によつて戴星堂は引き継がれ、明治時代初期頃まで実に三〇〇年余り続き、多くの門下生を輩出しました。当時の授業科目は読み・書き・算術などで、生活に必要な知識や能力を教えていました。学習の個人差に応じた教育を行い、農繁期には休みもありました。また、授業料についても、貧



一畑の寺子屋(戴星堂)跡

しい生徒には免除措置もあったようです。多くの子供たちに等しく学んでもらいたいとする、次郎右衛門の優しい想いが表れています。

平成二五年に小中一貫校として開校した豊後高田市立戴星学園という校名は、戴星堂の歴史と伝統を受けついで名づけられました。

【九州最大の一石地藏像を彫った仏師】

板井 国良

生没年不詳

板井国良は、法橋位(高い徳を積んだ僧侶に与えられる位。後に仏師や絵師にも与えられた)に就いたことでも知られる板井派の仏師(仏像を作る職人)です。

国良は、豊後高田市夷にある霊仙寺の二石地藏像(市指定文化財)などを作り、現在でも多くの作品が残っています。一石地藏像は国良(利三郎)・国俊(林三郎)親子と、国吉(徳四郎)の三人で製作した一大作品でした。総高は六三四センチで、一石地藏像としては九州最大の規模を誇り、運搬・建立には村人総出であったと伝えられています。現在でも多くの人の信仰の対象となっています。



霊仙寺地藏尊像

板井家には、法橋を任命した古文書(補任状)が現在まで伝わっています。国良をはじめ、国俊、国吉などが輩出されました。彼らは近隣の神社仏閣で仏像の製作に手腕を發揮しました。

【田染荘の水田を潤す空木池を造った】

たかはし まさみち
高橋 正路

生没年不詳

田染荘小崎は世界農業遺産「クヌギ林とため池がつなぐ国東半島・宇佐の農林水産循環」の縮図であると言われています。中でも大きなため池が二つ連なって造られ、田染荘の水田を潤しているシステムは世界に高く評価されました。

二つのため池の内、峠の頂点の空木池を造るときに指揮をとったのが、島原藩の奉行・高橋正路でした。これだけ大きな池を、高い所に造るのは容易なことではありませんでした。正路は池を造る村人達に、「用材を良く干して軽くする」など、多くの智恵を貸し、費用集めに各地を飛んでまわりました。突如洪水が起こり、せっかく造った堤防が崩れてしまうこともありましたが、正路は親身になってため池造りに取り組みました。

そしてついに、天保七年（一八三六）には大きなため池が完成したのでした。正路は後の報告書に、「空木池は『永代村の宝池』となった」と記したとおり、二百年近く経った今でも空木池は田染荘小崎の農業にとって重要な存在です。「丁寧な手入れをするように」という正路の言いつけの通り、現在でも池番に選ばれた地元の人が、交代で池を大事に管理しています。

【水路を引き、干害から地域を救った】

いのうえ へいしろう
井上 平四郎

天保六年（一八三五）
明治三〇年（一八九七）

桂陽小学校の西側にある志手村（現在の志手町）一帯は崖下の土地で、明治始めの頃まで水を引く便がなく、毎年のように干害を受けていました。この現状をなげき、何とか水を引く方法はなにかと考えたのが、江戸末期に同村に生まれた井上平四郎でした。明治十五年（一八八三）、平四郎は玉津にある円福寺崖下から湧き出る水に目をつけ、現在の高田中学校の崖下を通り桂陽小学校のある台地の下を通るトンネル水路を掘り、志手村に水を引こうと思ひ立ちました。

知人に声をかけ、協力して工事を始めましたが、簡単そうに見えた工事もしが始めてみると難工事となり、仲間は一人減り二人減り、ついには平四郎一人になってしまいました。測量術を知らない平四郎をあざけ笑う人もいましたが、平四郎は独学で工事を進めました。

なかなか工事は進まず、ついには財産を使い果たし、借金をするまでになりましたが、約二年後に全長三〇〇メートルのトンネル工事は完成しました。穴が開いたとき、平四郎は涙を流して喜んだそうです。平四郎の苦心の末に完成した「玉の井水路」のおかげで志手町一帯はその後、干害に悩まされることはなくなりました。

【多くの門人を育てた浮世絵師】

よしはら 真龍

文化元年（一八〇四）
安政三年（一八五六）

真龍は、国東郡真玉村西畑（現・豊後高田市中真玉）に生まれました。名は信行、通称を与三郎といたしました。

幼い頃より画に親しみ、常に花鳥人物を描写してその画才は人々を驚かせていました。若い頃に京都に上り三畠上龍に師事し、絵を学びました。師の画風を忠実に伝えながらも、幕末期の上方浮世絵と四条派風を折衷した独自の美人画を描いて、高い評価を得ました。



吉原真龍・作
（市中央公民館・蔵）

嘉永二年（一八四九）には御所参入の許しを得て「法橋」という名誉ある位に叙されました。晩年は嘉永六年（一八五三）に故郷へ帰り、その三年後に亡くなりました。没後、「法眼」の位を贈位されます。真龍は多くの門人も育てており、その数は百数十名に上ったといわれています。主な門人としては野畑如龍、単龍、春龍、景龍などがいます。

【幕末から明治に活躍した政治家】

あんどう 九華

文政八年（一八二五）
明治三十七年（一九〇四）



安東九華（はじめは貞五郎）は文政八年（一八二五）西国東郡佐野（現在の河内保育園付近）の庄屋に生まれ、幼い頃から漢文に親しみ、十五歳の時、帆足万里から「漢学」を学びました。

その後、三潞（現在の福岡県筑後地方）・福岡・大分の三県で県属（現在の公務員）として働きました。福岡県での勤務の際には、秋月の乱や西南戦争の鎮圧に力を注ぎました。明治二五年（一八八二）には西国東郡長になり、人々の生活を思いやった施策により、郡民から大変慕われました。明治二三年（一八九〇）国会が開設されると、選挙により衆議院議員になり、全院委員長にも選ばれています。衆議院議員時代には公共事業に特に力を注ぎました。

衆議院議員を辞職した後、生家の隣の寺院に寺子屋を開き、後進の育成を行いました。その寺小屋が現在の河内小学校になっています。

明治三二年（一八八九）に九華の功績を称え、地区民の手で生家の東側に大きな顕彰碑が建てられました。

【日米友好の架け橋となった、元海軍パイロット】

藤田 信雄

明治四四年（一九一〇）
〜平成九年（一九九七）

旧真玉町金屋に生まれた藤田信雄は、昭和七年（一九三二）海軍に入隊し、優秀なパイロットとして太平洋戦争に参加しました。戦争中、彼は潜水艦から水上飛行機を飛ばし、史上唯一、アメリカ合衆国本土（ブルッキングス市）への爆撃を実施しました。

戦後、アメリカから藤田のもとへ一通の封書が届きました。その内容は「アメリカはあなたの行為を責めてはいません。あなたの勇氣ある行動に敵ながらあっぱれと思つています。これからは、あなたを通じ更なる日米の友好親善をしたい。」というものでした。

その後、藤田はブルッキングス市の高校生を日本に招待したり、図書館建設のきっかけとなった寄附を行ったりして友好を続けました。そして、平成九年（一九九七）には藤田にブルッキングス市の名誉市民の称号が与えられました。藤田とブルッキングス市との



藤田信雄(前列左から二番目)とブルッキングス市の高校生(個人・蔵)

交流は、当時のアメリカ大統領レーガンの耳にも届き、ホワイトハウスからのメッセージと星条旗が藤田に送られました。そのメッセージには、「あなたの好意と惜しみない心に感謝して」と書かれていました。

【「ドラえもん」のもう一人の「生みの親」】

方倉 陽二

昭和二四年（一九四九）
〜平成九年（一九九七）

漫画家・方倉陽二は田染出身です。子供の頃から手先が器用で、数学と絵を描くことが好きな少年でした。学校の友達から戦車やゼロ戦の絵を描くことをせがまれるほど、当時から絵の技術は突出していました。ただし、本人は将来、好きな数学を使った仕事をしたいと思つていたようです。

その後、試しに応募した漫画が次々と入選し、本格的に漫画家の道を目指すことになりました。昭和四五年（一九七〇）から藤子スタジオのアシスタントを長く務め、『ドラえもん百科』などドラえもん関連の作品を多く手がけました。藤子不二雄からの信頼も厚く、方倉が『ドラえもん百科』内で独自に作り出したドラえもんの設定は、「方倉設定」ともよばれています。その中には、後に作者の藤子不二雄によって公式設定と認められたものもあります。



方倉の作品としては、『アカンベ』の『のんきくん』などの他、学習漫画も手がけています。数学関係の学習漫画の場合は、本人が好きたったこともあり、数学の監修者が用意してくれた資料が不要だったといえます。

【北原白秋を支えた情熱の詩人】



江口 章子

明治二十一年（一八八八）
～昭和二十二年（一九四六）

江口章子は明治二十一年（一八八八）に香々地町松原に生まれました。大分市の高等女学校に進み、そこで文学に興味を持ちました。その後、上京して北原白秋を知り、大正五年（一九一六）に白秋と章子は結婚しました。

北原白秋は当時、文壇から遠ざかり、どん底の苦しい生活を送っていました。しかし、白秋は章子に支えられ『雀の卵』などの作品を生み出し、世間に認められ文壇に復帰することができました。章子の献身的な努力は人々に認められ「賢く、才能のある白秋夫人」と言われていました。白秋は章子に支えられ数々の名作を発表しま



江口章子詩碑（長崎鼻）

し、国民的詩人とよばれるようになりました。二人の生活は、貧しいけれど、幸せでした。大正九年（一九二〇）、章子は思わぬことで白秋と離別しました。その後、香々地に何度か帰り、郷土の雑誌に自分の詩などを発表しました。章子の作品は現在も多くの人々に愛されています。

【初代弾劾裁判長】

鬼丸 義斎

明治二十一年（一八八六）
～昭和二十九年（一九五四）

昭和二十七年（一九五二）、サンフランシスコでの日米講話会議は、戦争を終えての新しい日本の門出となりました。敗戦から立ち直った日本が国際的主権を回復し、国際社会で活躍する節目の出来事でした。その時の全権大使は吉田茂をはじめ十一名。そのうちの一人が鬼丸義斎でした。

義斎は、香々地の三重の前田に生まれました。三重小学校を卒業後、愛知県で警察官になりましたが、人のために自分の力を活かしたいという思いが強くなり、苦学して弁護士になりました。周りの人々の信望も厚く、昭和三年（一九二八）に愛知県選出の国会議員となりました。昭和二十二年（一九四七）に参議院議員に当選し、初代弾劾裁判長になり、戦後処理の仕事に一生懸命取り組み、戦争の責任を負わされた人の待遇改善や名誉の回復に力を尽くしました。故郷を離れ名古屋にいても、郷土への思いが強かった義斎は、町民のために多額の寄付を行いました。郷土三重に生まれ、弁護士として、また国政で活躍した義斎は、惜しまれながら昭和二十九年に六九歳で亡くなりました。

【国際協調を唱えた陸軍大将】

みなみ
じろう
南 次郎

明治七年（一八七四）
～昭和三〇年（一九五五）

南次郎は高田村・玉津村等の区長をしていた南嘉平の次男として生まれました。十一歳で親元を離れ、叔父をたよって東京の靫絵小学校初級に編入しました。明治二八年（一八九五）に陸軍士官学校、明治三六年（一九〇三）に陸軍大学校を卒業し、昭和五年（一九三〇）には陸軍大将に昇進しました。

滿州事変が勃発した際は、第二次若槻礼次郎内閣で陸軍大臣を務めていました。国際協調を方針とする政府と、強硬派の陸軍内部との調整に苦慮しながらも、同郷の金谷範三とともに戦争の広がりを防ぐために力を尽くしました。

「南のあるところ、春風あり」と言われるほどの人情家であり、明るくユーモラスな人柄は誰からも慕われました。また、日露戦争当時の陸軍では、強いリーダーシップで猛者ぞろいといわれた第十三連隊を率いました。その指導方針は能力の向上、将校の団結などの他、特に敬礼は身をもって部下に範を示しました。生涯にわたって精神の鍛錬、修養と勉学に励んだ人でもありました。

【日本洋画界に新風を吹き込んだ】

かただ
とくろう
片多 徳郎

明治三二年（一八八九）
～昭和九年（一九三四）

西洋の画風をまねすることなく、日本人独特の油絵をめざし、日本の洋画界に新しい風を吹き込んだ画家・片多徳郎は、美和で生まれ育ちました。大分中学校を卒業後、母校・桂陽小学校の教師をしていましたが、どうしても絵の勉強がしたいという思いから、東京美術学校（後の東京芸術大学）への進学を果たしました。美術学校入学後、黒田清輝や岡田三郎助という立派な先生に学び、在学中の明治四二年（一九〇九）、画家として名誉ある作品展である第三回文展において「夜の自画像」が初入選しました。そして、大正八年（一九一九）には、第一回帝展に出品した「霹靂」が、多くの人を驚かせるほどの大変な評価を受け、三年後に、なんと三三才の若さで帝展の審査員に選ばれました。



「午休み」（昭和元年）
（大分県立美術館・蔵）

その後、日本の洋画界のリーダーとして活躍をしていましたが、健康を害し、昭和九年（一九三四）に四四歳の若さでなくなりました。

【真玉の産業を伸ばし村長になった】

佐藤 直造

安政三年（一八五八）
～大正五年（一九一六）

佐藤直造は真玉の浜地区に生まれました。明治四年（一八七二）、中津に出て手島塾に入り、漢学を学びました。明治九年（一八七六）真玉にもどり、産業を発展させようと力を尽くしました。

その当時、農家は米を作っても自らの主食は麦や雑穀とイモでした。直造は米の改良などに力を注いだだけでなく、藺草の栽培や莫産製造にも力を入れ、他県への研修や教師を招くなどして多くの人が産業に従事できるように取り組みました。また、ロウソクなどの原料となる木蠟の増産もすすめました。明治十二年（一八七八）頃から愛媛県の松山や山口県の徳山を視察させ、ハゼノキの苗木を大量に購入し、品質が良く、収量の多い木蠟製造へと発展させました。その結果、米だけでなく、藺草・木蠟等の商品作物も盛んになり、農家の収益が増えて、人々の暮らしは豊かになりました。



ロウソク等の原料となる白蠟

このような業績を認められ、県会議員、村長等の要職につき、自治のためにつくし、直造は国や県から表彰を受けました。

【戦争拡大を止めるべく尽力した参謀総長】

金谷 範三

明治六年（一八七三）
～昭和八年（一九三三）

明治六年（一八七三）に金屋町に医者の子として生まれた金谷範三は、鴛海量容が開いた私塾「涵養舎」に学びました。長じて成城学校を経て、陸軍を志し、明治二十七年（一八九四）に陸軍士官学校を成績優秀で卒業した後は、軍の要職を歴任し、昭和五年（一九三〇）には作戦計画を司る参謀本部のトップである参謀総長に就任しました。

昭和六年（一九三三）九月に関東軍（日本の満州駐屯軍）が南満州鉄道を爆破し、それを中国軍の仕業であるとして満州（中国東北部）の大半を占領する「満州事変」が起こりました。特定の派閥に属さず、穏健な性格の持ち主であった金谷は、事変が勃発すると、同じく郷土出身の陸軍大臣の南次郎や参謀本部総務部長の梅津美治郎少将と心を合せ、戦争拡大を意図する関東軍の暴走を抑えようとしてました。しかし、ついに果たせず、その責任をとって昭和六年十二月に参謀総長を辞任しました。



金谷範三
（豊後高田市史より転載）

国に行く末を心配する日々を送ること一年半、金谷は昭和八年（一九三三）六月六日に在任中に病死しました。

■参考文献

- ・西国東郡役所『西国東郡史』（一九二三）
- ・御手洗辰雄『南次郎』南次郎伝記刊行会（一九五七）
- ・荻須純道『日本中世禅宗史』木耳社（一九六五）
- ・村上富六『片多徳郎小伝』豊後高田市立図書館（一九七二）
- ・大分県教育百年史編集事務局『大分県教育百年史 第一巻』大分県教育委員会（一九七六）
- ・真玉町誌刊行会編著『真玉町誌』（一九七八）
- ・香々地町誌刊行会『香々地町誌』（一九七九）
- ・大分県立宇佐風土記の丘歴史民俗資料館『豊後国都甲荘の調査』（一九九三）
- ・駕海量容先生と涵養舎記録保存会編『駕海量容先生と私塾涵養舎』（一九九三）
- ・豊後高田市編『豊後高田市史特論編くにさきの世界くらしと祈りの原風景』（一九九六）
- ・豊後高田市編『豊後高田市史通史編』（一九九八）
- ・香々地町文化協会『江口章子』（一九九九）
- ・中野等『人物叢書 立花宗茂』吉川弘文館（二〇〇一）
- ・豊後高田市学びの二二世紀塾『地方からの教育創造 昭和の町は教育の町です 第二集』（二〇一〇）
- ・豊後高田市学びの二二世紀塾『地方からの教育創造 昭和の町は教育の町です 第三集』（二〇一一）
- ・豊後高田市学びの二二世紀塾『地方からの教育創造 昭和の町は教育の町です 第四集』（二〇一二）
- ・宇佐市編『幕末の賀来一族 飛霞と惟熊』梓書院（二〇一三）
- ・国東市教育委員会編『ふるさと国東の偉人伝』（二〇一三）
- ・倉田耕一『アメリカ本土を爆撃した男 大統領から星条旗を送られた藤田信雄中尉の数奇なる運命』毎日ワンス（二〇一四）
- ・たかや健二『雲遙かなり 方倉陽二記』豊後高田市（二〇一四）
- ・辻野功『親子で読む大分偉人伝』大分学研究会（二〇一四）
- ・豊後高田市教育委員会編『都甲谷の歴史』（二〇一五）
- ・渡辺克己『大分の文化振興支援サイトNAN? NAN? NAN?【第二章】大友家臣の反乱』『大分県の文化振興支援サイトNAN?NAN?』(URL: <http://www.nan-nan.jp/>)

■豊後高田市人物伝『伝えたい！豊後高田の先人たち』編集委員会

早田義司郎(高田中学校校長)／河野史武(河内中学校校長)／山本輝昭(戴星学園学園長)／今熊啓司(田染中学校校長)／升巴洋一郎(香々地中学校校長)
渡邊留理子(高田小学校校長)／矢野省三(桂陽小学校校長)／坂本美佐子(河内小学校校長)／奥田悦生(草地小学校校長)／大波多正子(呉崎小学校校長)／畑尾洋之(田染小学校校長)
松成富義(真玉小学校校長)／吉村郁子(臼野小学校校長)／瀬口卓士(三浦小学校校長)／光門孝樹(香々地小学校校長)

■事務局

河野潔(豊後高田市教育長)／佐藤清(市参事兼教育庁総務課長)／小川匡(学校教育課長)／板井浩(参事兼文化財係長)／大山琢央(文化財係)／松本卓也(文化財係)

■協力機関・協力者

本書の発行にあたっては、次の機関・方々から協力を頂きました。記して感謝の意を表します。(敬称略・五十音順)
大分県立美術館／大分県立歴史博物館／大分市歴史資料館／廣瀬資料館
浅倉順子／池田隆代／園田大／野上サキ子／平川毅／細井雅希／松岡健太／村上博秋

■凡 例

- ・ 本書は豊後高田市に関連する先人を、時代順に紹介した冊子である。
- ・ 掲載した人物については、郷土出身者及びゆかりのある者を取り上げた。人物の選考は、政治・教育・文化・産業等で活躍した人物、子どもたちの人生の指針となるような人物を基に事務局・編集委員会が行った。
- ・ 本書の執筆・編集については、豊後高田市教育委員会事務局及び各編集委員が担当した。
- ・ 本書に掲載している写真等は、原則として豊後高田市教育委員会が撮影、所蔵しているものを使用している。但し、別機関等から提供を受けたものについては、個別にその旨を記している。
- ・ 本書は小学校高学年～中学生を対象としているため、文章については読みやすさを重視し、平易な表現を心掛けた。地名・人名及び難読表現については必要に応じてルビをつけている。
- ・ 年代は原則として、元号(西暦)を併記することとした。

伝えたい！豊後高田の先人たち

発行日 平成二八年三月

編 著 豊後高田市人物伝『伝えたい！豊後高田の先人たち』編集委員会

発 行 豊後高田市教育委員会

〒八七二―一一〇一 大分県豊後高田市中真玉二一四四番地一二

印刷 宗印刷所 有限会社



伝えたい！
豊後高田市の
先人たち